

女はとても喜んで、今日中に苗を植え終れば、故郷に帰れると思つてわき目もふらず、田植を始めた。しかし、その下女は生後間もない乳呑児を持つていた。下女はその乳呑児を背に負い、夢中になつて苗を植えていた。乳呑児はその時風邪を引いて時々せきをしていたが、下女はすっかり乳呑児のことなど忘れ何かつかれたように苗を植えつづけた。陽は漸く西にかたむき暮れかかった頃に、とうとう一反歩の田全部の田植を終つた。下女はホツと一息ついて「ああ、これでよかつた。なつかしいわが家にも帰れるのだ。」と喜びながら、背中の赤ん坊を自分の胸に抱こうとした。ところが赤ん坊の様子がおかしい。ぐったりして動かない。赤ん坊はとうに死んでいたのであつた。下女は、余りの悲しさに声をあげて泣きさげんだ。しかし赤ん坊は、とうとう生き返らなかつた。

それから後、この田に苗を植える時は毎年雨が降つて悪い日が続いた。村人は誰いうとなく、あの乳呑児の恨みが、こうさせるのだというわさが広まつた。そしてみんなで相談して、その田の側に小さな地蔵様を建て、赤ん坊の霊を慰めることになつた。その後、村びとたちは別の場所に地蔵様を移し、ねんごろに供養をした。しかし、それからその居酒屋にもいろいろの事が起つたりしたので、村では赤ん坊のたたりだといううわさが広まつて地蔵堂に寄りつかなくなつた。そして、地蔵堂は荒れ果てて行つた。そこで、心ある村びとたちは再び地蔵様を元の所に移して、拝がむようになつた。どこの家でも子供が風邪をひくと、地蔵様の首を縄で縛つて早く快くなるように祈つた。乳呑児の母だつたあの下女もいつからか村から姿を消していた。その後何年かたつても、彼女の消息を知る人は誰もいなかった。村人たちは地蔵様を風邪引き地蔵と呼ぶようになった。